

ロッシーニ 《グローリア・ミサ》 作品解説 水谷 彰良

初出は 2015 年 ROF 予習会の配布テキスト。増補改訂版を日本ロッシーニ協会ホームページに掲載します。

(2015 年 7 月増補／8 月再改訂)

題名 グローリア・ミサ *Messa di Gloria*

註：本来の題名は、《四声と幾つかのオブリガート楽器付きのミサ曲 (*Messa a Quattro voci e più strumenti obbligati*)》
(解説参照)

作曲 1820 年 (3 月または以前)

歌詞 ミサ通常式文より。ラテン語

初演 1820 年 3 月 24 日ナポリ、聖フェルディナンド教会 (Chiesa di San Ferdinando)

編成 ソプラノ、コントラルト [註]、2 テノール (I・II)、バス、混声合唱 (ソプラノ、コントラルト、テノール、バス)、
管弦楽

註：フィリップ・ゴセットはソプラノ II とし、後述ハント版はコントラルトとメゾソプラノの表記を混用、自筆楽譜の
大半を消失し、二人の女声ソリストが校訂者ごとに「ソプラノ I・II」「カント [ソプラノ] I・II」もしくは「ソプラ
ノとコントラルト」と解釈が分かれる。ロッシーニはコントラルトまたはソプラノ II の独唱をテノール独唱とする改
作も行った (解説参照)。

初演者 不詳

註：王宮に付属した修道院での演奏のため、合唱の女声パートをボーイ・ソプラノやカストラートが歌ったと推測。初演
に列席したスコットランド人の音楽愛好家ジョン・ヴァルディ (John Waldie, 1781-1862) の日記 (1820 年 3 月 24
日付) から、ソプラノ独唱をカストラートのモイゼ・タルクイーニオ (Moisè Tarquinio, 1790c?)、テノール独唱をジ
ョヴァンニ・バッティスタ・ルビーニ (Giovanni Battista Rubini, 1794-1854) とジュゼッペ・チッチマツラ (Giuseppe
Ciccimarra, 1790-1836) が務め、バス独唱はアントーニオ・アンブロージ (Antonio Ambrosi, 1786?) もしくはミケ
ーレ・ベネデッティ (Michele Benedetti, 1778? [1850 以降]) が歌ったことが判る。²

演奏時間 約 60～65 分

自筆楽譜 ブリュッセル王立音楽院、ミシヨット文庫 (〈ドミニネ・デウス〉冒頭頁のみ)。

註：最も重要な現存楽譜はナポリのサン・ピエトロ・ア・マイエツラ音楽院図書館所蔵のロッシーニ自筆の訂正が
加えられた全曲の筆写パート譜で、初演に使用されたと認定。さらに、それを原本とする筆写総譜がミラーノの
リコルディ社資料庫にある。

初版楽譜 Schonenberger, Paris, 1860. (ピアノ伴奏譜。但し〈クム・サンクト〉を欠く)

Kunzelmann, Zurich, GM791, 1987. (ハーバート・ハント Herbert Handt 校訂、ピアノ伴奏譜。全曲初版)

現行譜 Kunzelmann, Zurich, 1987. (前記)

全集版 未成立

註：ロッシーニ財団批判校訂版の第一次校訂譜は 1991 年にジョヴァンニ・アッチャーイ (Giovanni Acciai) 校訂で成
立し、1992 年 ROF で使われた——*Messa di Gloria per soli, coro e orchestra*: prima esecuzione Napoli, Chiesa
di San Fernando, 24 marzo 1820 / Gioachino Rossini; edizione critica della Fondazione G. Rossini di Pesaro in
collaborazione con la G. Ricordi & C. s.p.a. di Milano a cura di Giovanni Acciai.

構成 1995 年 ROF プログラムのゴセット論文ならびにハント校訂ピアノ伴奏譜 (前記) をベースに 2015 年 ROF プログラム
を参照。ナンバーは便宜的区分で、理論的には〈キリエ Kyrie〉と〈グローリア Gloria〉の二部分からなる。

N.1 キリエ Kyrie 〈主よ、憐れみたまえ Kyrie, eleison〉(合唱) ～ 〈キリストよ、憐れみたまえ Christe, eleison〉
(テノール I・II) ～ 〈主よ、憐れみたまえ Kyrie, eleison〉(合唱) 註：Kyrie と Christe の後にカンマ「,」

N.2 グローリア Gloria 〈いと高きところ神に栄光あれ Gloria in excelsis Deo〉(ソプラノ、コントラルト、テノール、
バス、合唱)

N.3 ラウドダムス Laudamus 〈我ら主をほめ Laudamus te〉(ソプラノ) 註：ソプラノの代わりに Canto の表記も使わ
れる。

N.4 グラティアス Gratias 〈感謝し奉る Gratias agimus tibi〉(テノール)

N.5 ドミニネ・デウス Domine Deus 〈神なる主 Domine Deus〉(ハント版はヴァージョン A [ソプラノ、メゾソプラノ、
バス] とヴァージョン B [ソプラノ、テノール、バス] の楽譜を掲げる。ヴァージョン A の女声には Canto I・II の表記
も使われる)

N.6 クイ・トリス Qui tollis 〈世の罪を除き給う主よ Qui tollis peccata mundi〉(テノール、合唱)

N.7 クオニウム Quoniam 〈主のみ聖にして Quoniam tu solus〉(バス)

N.8 クム・サンクト Cum Sancto 〈聖霊とともに Cum Sancto Spiritu〉(合唱)

解説

【作品の成立と初演】

1819年12月26日にミラーノのスカラ座で初演した《ビアンカとファッリエロ (*Bianca e Falliero*)》は冷たい反応で迎えられ(『ミラーノ新聞 (*Gazzetta di Milano*)』12月29日付)³、翌1820年1月になっても評価が好転しなかった。最初の3回を監督したロッシーニはミラーノを離れ、ボローニャで両親と再会して数日過ごす⁴と1月4日にボローニャを発ち⁴、同月12日にはナポリに帰還していた。サン・カルロ劇場の音楽監督を務めるロッシーニは、謝肉祭期間に予定されたガスパーレ・スポンティーニ《フェルナンド・コルテス (*Fernando Cortez*)》(《フェルナン・コルテス、またはメキシコ征服 (*Fernand Cortez, ou La conquête du Mexique*)》[1809年パリ・オペラ座初演]のイタリア語版。伊語台本はジョヴァンニ・シュミットによる)の稽古を監督し、2月4日に初演を迎えた(7回上演)。

続いてロッシーニは3月の《エジプトのモゼ》再演に際して楽曲の差し替えを行うと共に⁵、四旬節にサン・カルロ劇場で予定したピエートロ・ライモンディ (*Pietro Raimondi, 1786-1853*、ロッシーニの先輩オペラ作曲家で有名な対位法教師。当時ナポリの音楽院の作曲教授も務めていた)作曲《バビロニアのチーロ (*Ciro in Babilonia*)》(初日は3月19日)の上演準備に携わった。並行して作曲したのが、聖ルイージ大信徒会 (*Arciconfraternita di San Luigi*)——正式名称は王立七つの嘆きの聖母大信徒会 (*Real Arciconfraternita di Nostra Signora dei Setti Dolori*)——の祈祷式のための《グローリア・ミサ (*Messa di Gloria*)》である。但し、委嘱と作曲の経過を詳らかにするドキュメントは現存せず、ロッシーニの両親宛の手紙にも言及されない(1820年2月11日~4月12日の間の書簡は存在が確認されない)。けれどもミラーノからナポリに戻った1年半ば以降、前記のように多忙をきわめたことから、3月中に短期間で作曲したものと思われる⁶。

演奏の告知は3月23日付『両シチーリア王国新聞 (*Giornale del Regno delle Due Sicilie*)』において次のようになされた——「明日、聖フェルディナンド教会にて、令名高きマエストロ、ロッシーニによって初めて書かれた偉大な音楽により聖母マリア痛悔の祭 (*festa de' Dolori di Nostra Signora*) が厳かに挙行される」⁷。初演は翌3月24日、サン・カルロ劇場の向かいにある聖フェルディナンド教会 (*Chiesa di San Ferdinando*) にて行われたが、演奏者に関する情報を欠く。批評は一週間後の同紙に掲載され、「ロッシーニは荘厳ミサのために書いた彼の音楽において、学識豊かな、威厳ある、卓越した作曲家であることを示した。[中略] この新たな作品の中でもとりわけ〈グローリア〉の独創的な美しさが挙げられる。ロッシーニはこの不滅の賛歌が天使の合唱によって歌われたと思ひ描いた」と評された(3月31日付)⁸。この批評には、パイジエッロ編曲のペルゴレージ《スタバト・マーテル》⁹が併演されたと書かれている。

【特色】

《グローリア・ミサ》はロッシーニがオペラ作曲家時代に作曲した唯一の本格的宗教曲で、1820年にミサ曲を作曲したことは古くから知られていたが、1960年代までその楽譜は失われたとされていた。テキストにラテン語の通常式文の〈キリエ〉と〈グローリア〉を用い、楽曲は〈キリエ〉〈グローリア〉〈ラウドムス〉〈グラティアス〉〈ドミネ・デウス〉〈クイ・トリス〉〈クオニウム〉〈クム・サンクト〉の8曲からなる。

自筆楽譜の現存はブリュッセル王立音楽院のミショット文庫所蔵〈ドミネ・デウス〉冒頭頁のみで、それも僅か9小節にすぎないが、全曲の自筆楽譜から抜き取られたもので、1846年にロッシーニが友人ギュスターヴ・ヴァエス (*Gustave Vaéz, 1812-62*) に贈った際の献辞が「ヴァエス氏へ/ジョアキーノ・ロッシーニ/ボローニャ、1846年7月15日」と書かれている。残りはすべて消失したと思われるが、重要な楽譜素材に聖フェルディナンド教会の資料庫に由来する全曲の筆写パート譜が初演用の演奏譜と認定されている(ナポリのサン・ピエートロ・ア・マイエツラ音楽院図書館所蔵)。そこには各曲の最初の数頁にロッシーニ自筆の訂正があり、〈ドミネ・デウス〉(第5曲)のソリストは「ソプラノ I・II、バス」から「ソプラノ、テノール、バス」と変更されている(ハント版はヴァージョン A/Bとして掲載)。ナポリのパート譜から写譜された総譜はミラーノのリコルディ社資料庫にあり、第三者の手で多数の修正が施されている。他にもボストン、パルマ、ローマに筆写譜が残されているが、その大半が題名を《四声と幾つかのオブリガート楽器付きのミサ曲 (*Messa a 4 Voci e più strumenti Obligati*)》とする。これは独奏楽器のオブリガートが独唱に関与する曲(コンチェルトタンテ)が



ナポリの音楽院所蔵のパート譜

含まれることに起因した命名で、本来の題名と推測しうるが、ロッシェニ財団ではロッシェニが手紙に記した《グロリア・ミサ (Messa di Gloria)》を採用した¹⁰。

これはオペラと同質の装飾歌唱様式を備えたミサ曲で、すべての曲がロッシェニ自身の作曲と信じられてきたが、ジェス・ローゼンバーグ (Jesse Rosenberg) による 1995 年ニューヨーク大学学位論文 (*The experimental Music of Pietro Raimondi*) において終曲〈クム・サンクト〉がピエートロ・ライモンディ (Pietro Raimondi, 1786-1853) の作曲と論証され、これを受けて《グロリア・ミサ》批判校訂版の校訂者の一人フィリップ・ゴセットもロッシェニの求めでライモンディが作曲したと認定した (本稿末尾の譜例参照)¹¹。次に、楽曲単位での解説を付す。

N.1 キリエ Kyrie

次の三つの部分からなる。

- (1) 〈主よ、憐れみたまえ Kyrie, eleison〉(合唱) 変ホ長調、4分の4拍子、アンダンテ・ソステヌート。不協和音によるパセティックな短調の序奏冒頭8小節に続いて変ホ長調の主調となり、四声の混声合唱が和声的に〈主よ、憐れみたまえ〉と唱和する。短調のパセティックな契機が隠し味。
- (2) 〈キリストよ、憐れみたまえ Christe, eleison〉(テノール I・II) 変ト長調、4分の3拍子、アンダンテ・グラツィオーゾ。二人のテノールが三度平行のハーモニーを中心に抒情的な旋律で〈キリストよ、憐れみたまえ〉と歌う。
- (3) 〈主よ、憐れみたまえ Kyrie, eleison〉(合唱) ハ短調/変ホ長調、4分の4拍子、アンダンテ・ソステヌート。序奏を短縮して(1)の音楽を再帰させ、ピアノシモの変ホ長調の和音で消え入るように [morendo] 閉じられる。

N.2 グロリア Gloria 〈いと高きところ神に栄光あれ Gloria in excelsis Deo〉(ソプラノ、コントラルト、テノール、バス、混声合唱) ハ長調、4分の4拍子、アレグロ。トランペットのファンファーレ、行進曲のリズムによる序奏に続いて4人のソリストと合唱による輝かしく壮麗な音楽で神の栄光を称える。

N.3 ラウドムス Laudamus 〈我ら主をほめ Laudamus te〉(ソプラノ) イ長調、4分の2拍子、アンダンテ・マエストロ〜4分の4拍子、アレグロ・ジュスト。前奏の冒頭2小節は《ビアンカとファッリエーロ》(1819年) 第1幕ビアンカのカヴァティーナ〈真紅のバラの〉(N.3)に前例があり、後に《ランスへの旅》コリンナと騎士ベルフィオーレの二重唱(N.5)前奏にも使われる。緩〜急の二つのテンポからなるアリアで、装飾的なカウンタービレ旋律の前半部とアレグロ・ジュストの後半部共にオペラ・アリアと同質のスタイルを持つ。

N.4 グラティアス Gratias 〈感謝し奉る Gratias agimus tibi〉(テノール II) ヘ長調、4分の4拍子、アンダンテ・マエストロ。コルノ・イングレーゼ独奏のオブリガートを持つテノールのアリア。長い前奏に続いて伸びやかな抒情旋律がゆったりとしたテンポで歌われる。

N.5 ドミネ・デウス Domine Deus 〈神なる主 Domine Deus〉(ハント版はヴァージョン A [ソプラノ、メゾソプラノ [註]、バス] とヴァージョン B [ソプラノ、テノール、バス] の楽譜を掲げる) 変ホ長調、4分の2拍子、アンダンテ・グラツィオーゾ。女声二人とバスの三重唱として作曲されたが、後にロッシェニ自身がソプラノ、テノール、バスの三重唱に変更している。旋律を共有するのは二人の高声で、バスは低声の支えに留まる。旋律は《パルミラのアウレリアーノ》(1813年) 第1幕導入曲で歌われるゼノーピアとアルサーチェの小二重唱〈もしも私を愛しているなら、ああ、わが女王よ (Se tu m'ami, o mia regina)〉の転用改作に当たる。
註：ハントがメゾソプラノとする根拠は不明。ゴセットはソプラノ II とする。

N.6 クイ・トリリス Qui tollis 〈世の罪を除き給う主よ Qui tollis peccata mundi〉(テノール、混声合唱) ホ短調、4分の4拍子、マエストロ〜アンダンテ・コン・モート〜ホ長調、[アンダンテ]〜アレグロ。序奏冒頭の不協和音は調性を変えての〈キリエ〉冒頭の再帰に当たり、当時ロッシェニが好んだ開始の音楽でもある (本作が《湖の女》と《ビアンカとファッリエーロ》に続く作品であることに留意されたい)。一定のパターンの伴奏音型を用いた合唱が序奏部をなし、続いて装飾的で技巧的なテノール (II) の合唱付きアリアとなる。1オクターブ半を超える跳躍と強靱なコロラトゥーラ、最高音 c³ の記譜や明確なアレグロのカバレッタの用法に初演歌手の卓越が聴き取れる (ジョヴァンニ・バッティスタ・ルビーニもしくはジュゼッペ・チッチマッラによって歌われた)。

N.7 クオニアム Quoniam 〈主のみ聖にして Quoniam tu solus〉(バス) 変ホ長調、4分の4拍子、アレグロ・マエストロ。クラリネット独奏のオブリガートを持つバスのアリアで、その旋律は比較的初期のロッシェニのタイプに属する (例えばフルートのオブリガートを持つ《幸せな間違い》ベルトラント公爵のカヴァティーナ)。なお、コロラトゥーラを伴うバス独唱の《クオニアム》が1813年に作曲されている。

N.8 クム・サンクト Cum Sancto 〈聖霊とともに Cum Sancto Spiritu〉(混声合唱) 変ロ長調、2分の4拍子、ルゴ〜アレグロ〜テンポ・ブリーモ [ラルゴ〜アレグロ]〜メーノ・モッソ〜ラルゴ)。既述のようにロッシェニがピエートロ・ライモンディに作曲を委ねた終曲で、冒頭4小節の無伴奏「Cum Sancto Spiritu」に続く

アレグロのフーガ主題は、後日ライモンディ自身の《グローリア》に再使用される（譜例参照）。このフーガは四つの声部を管弦楽が重奏する古典的様式であるが、無伴奏の冒頭部の繰り返しに続いて主題を上下反転させて展開するなど対位法教師としてのライモンディの卓越を証明するものの、管弦楽法はやや貧相である。

譜例¹²

ロッシェニ《グローリア・ミサ》終曲のフーガ主題



ライモンディ《グローリア・ミサ》終曲の Amen

以上、《グローリア・ミサ》の概略を示したが、ロッシェニのオペラ作曲家時代唯一の大規模宗教曲である本作は、オペラ・アリアの形式を混在させながらも独自の宗教曲のイメージを結晶させた最初の作品として意義があり、よりロマンティックな《スタバト・マーテル》へと飛躍する出発点としても興味深い作品である。

推薦ディスク

- ・ネヴィル・マリナー指揮アカデミー&コーラス・オブ・セント・マーティン・イン・ザ・フィールズ、スミ・ジョー (S)、アン・マレー (A)、ラウル・ヒメネス (T)、フランシスコ・アライサ (T)、サミュエル・レイミー (B) 1992年録音 Philips 434 132-2 (海外盤)

註：ロッシェニ財団批判校訂版の第一次校訂譜（ジョバンニ・アッチャーイ校訂）を使用。《ドミネ・デウス》はヴァージョン A [ソプラノ、コントラルト、バス] を演奏。



- ・ハーバート・ハント指揮ブラハ・ヴィルトゥオーゾ、チェコ室内合唱団、カルメン・アコスタ (S)、マリオ・ゼッフィーリ (T)、ウィリアム・マッテウツィ (T)、クリストフォロス・スタンボリス (B) 1999年録音 Hanssler Classic CD 98.359

註：最初の校訂者ハント指揮による録音。《ドミネ・デウス》はヴァージョン B [ソプラノ、テノール、バス] を演奏。荒削りだが、筆者のお薦めはこの録音。



¹ 2015年8月19日にペーザロで行われた講演会「Rossini e il Sacro」の配布資料では、N.3にCanto [Soprano]、N.5にCanto I [Soprano]、Canto II [Mezzo-Soprano o Contralto] の表記を使用。

² Sergio Ragni, *Una Messa nobile* [in “Messa di Gloria”, Programma del ROF, 2015., pp.13-20.], pp.15-17.

³ Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004., p.258., n.5. に引用あり。

⁴ 父ジュゼッペの日誌、1820年1月4日付 (Gioachino Rossini, *Lettere e documenti., vol.I., 29 febbraio 1792 - 17 marzo 1822., a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., Pesaro, 1992., pp.402-403.*)

⁵ 第1幕ファラオーネのアリア〈眼からうろこが落ち (Cade dal ciglio il velo)〉(N.4) を新たに作曲してミケーレ・カラーファ作曲のアリア (N.4a) と差し替え。初日は3月1日で、合計5回上演。

⁶ 関連ドキュメントが絶無であることから、ハント版の序文やゴセット論文（次註）では作曲時期の推測がされないが、後述する《グローリア・ミサ》へのライモンディの関与や周辺状況、ヴェントの『ロッシェニ伝』（1824年）における「2日間で作曲」の記述を勘案すると、3月中に着手・完成したものと推測しうる。

⁷ Philip Gossett, *Passaporto per il Paradiso* [in “Messa di Gloria”, Programma del ROF, 1995., pp.27-31.], p.11. の引用より。

⁸ Ibid.

⁹ 弦楽合奏に管楽器を加え、ソリストを4人に増やした編曲版。

¹⁰ ロッシェニの日付不詳の手紙（フィレンツェの伯爵フェルディナンド・グイッチャルディーニ [Ferdinando Guicciardini] 宛。1820年秋と推定）に「グローリア・ミサ (messa di Gloria)」と書かれ、ナポリの王立王宮礼拝堂資料所蔵音楽目録の1854年の手書き目録も同様に記載。ハント版のタイトル頁では「MESSA DI GLORIA a quattro voci e più strumenti obbligati」とされる。

¹¹ ローゼンバーク学位論文の関係箇所は、イタリア語訳でロッシェニ財団紀要1995年度版に掲載 (pp.85-102.)。

¹² 譜例はロッシェニ財団紀要1995年度版から転載。